

朝のグラウンドは優しい

少しだけひやりとした空気の中で、私はピッチャーマウンドの上から水を撒いていた。スパイクと違って、アップシューズは砂の上を滑る。ホースからぶわっと自由になつていく水たちの音以外は静かだ、ざり、と歩きたびに足音が鳴る。

数分経つと、後輩が一人、走つて来た。

「おはようございます」

少し声を張つて挨拶をする。彼も「おはようございます」と帽子を取つて頭を下げ、乱雑に整理された倉庫からベースとトンボを手際よく取り出して、まずはダイヤモンドにベースを置いた。トンボは二本出しているあたり、やっぱり気がきく。

今日は集合が部室前だから、準備が終われば少し遠くにある部室まで戻る。それを知りながら準備に来たのは、やっぱりこの後輩だからだろうな、とも思う。

ホースをしまい、グラウンド整備に取り掛かろうとして、ホース入れのハンドルを回す。だが、クルクルと半分ほど巻いたところで、がちんと何かが引っかかり、ハンドルが動かなくなった。

「あー……」

巻いている部分を確認すると、青色のホースは、折れ曲がつたり捻つたり、あまり見ていられない状態になっている。雑さを反省しながら、一度引つ張り出そうとしたが、

「あれ？」

ハンドルは動かない。どうやら、進むにも引くにも不可能となつたらしい。

「……大丈夫ですか」

見かねた彼が近くに来た。先輩としての威厳など、後輩たちに敬語を使っている時点で消えているから、「……上手くできないです」と簡単に助けを求める。

「ちょっと貸してください」

詰まりかけた青色のホースを受け取ると、ぐいと強く引つ張つて一度全て取り出してから、再びハンドルを持つて巻き始めた。先程の惨事とは違い、規則正しく青色が回転していく。

「できました」

「ありがとうございます」

いえ、とホースから手を離して、彼は私に首を振る。笑う。

それは非常に余裕のある動作のように見えた。

「……急に優しいですね」

普段から優しいが、こうやって困っている時に助けてくれるのはめずらしい。皮肉を込めたつもりはなく、少し軽口を混ぜるよう言った。

すると彼は少し驚いた表情で言った。

「え、僕いつも優しくくないですか」

「……えっ？」

かなりの間の後、聞き返した。何を言われたか、一瞬分からなかった。ぼかんとした表情の私に、彼がはつと、自分の発言を脳内で反芻する。

「……あ、いや、何でもないです」

彼が言葉をつまみ潰して、微妙な静けさが訪れた。なんだかぼつが悪くて、黙ってトンボを持ち、二遊間、セカンドベースあたりに向かった。念入りに平らにしていく。彼も黙って、ピッチャーの守備位置あたりを、さあ、さあ、と音を立ててきれいにしていく。

その様子をちらりと伺う。帽子の下の大人しそうな表情。練習用の白いユニフォームに包まれた細い体、背は高い。少し猫背、静かな雰囲気。部内で彼は、謙虚で優しい。

しかし何かバグを起こした。私の前で、はらりと本音をこぼした。何も描かれていない、真っ白だと思っていたキャンパスが、実は一度真っ黒に塗った後に分厚く白で塗り直したんですよと言われるような気分になる。

八時二十分になり、トンボを片付ける。私の方が倉庫に近い。

「あ、もらいます」

トンボを受け取り、ある程度きれいに並べて、きちんとドアを閉める。部室に向かう途中、彼と隣合わせで歩く。

間に流れるのは、止まりかけのコマみたいな、ぐらぐらした沈黙だった。蝉も何かを我慢するように鳴かない、学校内で今日活動があるのは野球部だけだ、私はあっさり根負けして、一つ息を吐く。頭の中でコマが止まった。彼を見ると、ゆっくり見返される。

勇気がなくて直視はできず、結局目を逸らした。

「私も」

呟くように、続ける。

「……本当は自分優しいんじゃないかなとは、思っていますよ」

世の中の優しい人の99.5%は、自分の優しさを自覚していると思う。そしてそれを、自分のイメージがプラスになるよう利用していると思う。

そして、私も彼も、その例に漏れない。

誰がやってもいいことを、誰かのためになることを、あえて「自分」がやるのは、とても甘く見た目だけ美しい。他人が見ていけばより甘さは増し、うわべの美しさがコーティングされる。だから、比例するように黒くなっていく内側に、その他大勢は気が付かない。

ただ、同じ行為をする人だけは、その内部が、いかにどす黒いものかを知っている。

「でも、優しいって自分で言ったらすでに優しくないんじゃないかなと思ってた」

グラウンドの光る砂を見ながら言うと、「僕もちよつと思います」と返ってきた。

「……まあそれでも、その行為自体は優しいじゃないですか」

「それもすごく思います」

首を大きく縦に振って、私は言葉を続ける。

「ていうかそもそも練習の準備なんて自分のためですけどね」

彼が深く頷いた。自分が使うから準備をする。それを、みんなの分もまとめて行うだけだ。だから、実は優しいわけじゃ、ないのかもしれない。

「……打算とか自分の利益みたいなが入ってたら、優しくはないかもしれないですね」

防球フェンスを避けながら、私の脳内を再生するかのように彼が言う。

「でも、その行為自体は優しいですよ？」

「たしかに」

顔を見合わせて、ふっと笑った。

「難しいですね、優しいって」

ざり、と足元の砂が擦れた。ふっと振り返る。日の光が目に入り、「優しい」の意味がどれだけ揺れても、朝のグラウンドは、たしかに優しい。